そして，そのような川を「シーボルトの川」と表現している．その一例として，長崎県川棚町の石木川を挙げ，生物多様性保全や生態系保全のために重要であることを述べている．第 17 章ではシーボルトが江戸参府の折に見た自然景観は街道沿いの里山であったと述べている．生物多様性における里山の重要性は広く知られているが，圃場整備などによって水田や水路の生態系は激変し，魚類を含む多くの水生生物が消滅しつつある．現在の状況からシーボルトが見た田園風景に戻ることは不可能であるが，環境保全に配慮した工法を行うなど，生物多様性や生態系の保全を重視することの重要性が述べられている．

第 4 部は，それぞれの魚種の写真や図，そして，解説文から構成されている．解説文には，基本的に 3 つの見出しがあり，「シーボルト標本」，「ニホンウナギの原記載」，「ニホンウナギが棲む水辺の原風景」のように，扱う魚種名が見出しに含まれている．「シーボルト標本」と「○○の原記載」の項目では，主に分類学的な課題が検討されている．それぞれの魚種に関する解説を読むと，依然としてシーボルト・コレクションには検討すべき課題が残されていることが分かる．残念なことに，3 つ目の見出しに不統一が見られる．ニホンウナギでは「ニホンウナギが棲む水辺の原風景」となっているが，コイでは「コイの棲む原風景」となり，ミナミメダカでは「ミナミメダカが棲息する原風景」となっている．同じ内容を扱っているのだから，見出しは統一すべきであった．また，3 つ目の項目で述べられていることは「○○が棲む水辺の原風景」というよりは，それぞれの魚種の分類学的課題や棲息場所の紹介，生態的情報などであり，「備考」という見出しの方がふさわしいように思える．なお，伊藤大樹と森宗智彦は第 1 部から第 3 部の著者ではないが，第 4 部の魚種解説の著者となっている（伊藤：オイカワ，ハス；森宗：カワムツ，ヌマムツ，アブラボテ，カネヒラ）．

引用文献に関する誤りは少ないとは言えない．引用文献と本文に出てくる文献の著者や出版年が一致しない，引用文献にある文献が本文にない，本文に引用されている文献が引用文献にないなど，少なくとも 57 件の誤りがある．また，第 1 部から第 3 部では「引用文献」という見出しを用いているが，第 4 部では「参考文献」となっている．さらに，本文中の誤字や脱字もかなりある．また，前述したように，水辺の原風景を研究するためには，学際的な研究が必要となる．すなわち，魚類学者，考古学者，歴史学者，さらには河川工学者の連携が必要であろう．

上記のように本書には問題もあるが，内容的には従来にない視点から興味深い検討がなされている．『日本動物誌』が出版されてから約 180 年，シーボルトが魚類を収集してから 200 年弱が経過しているが，本書の編者と著者は，シーボルト・コレクションを現代的な視点から研究すれば，新たな成果が得られることを本見事に示してくれた．多くの魚類学会会員に本書を一読されることを勧めたい．

引用文献

Goebel, A. 2005. Conservation systematics: The *Bufo boreas* species group. Amphibian declines—the conservation status of United States species. Pages 210–221 in M. Lannoo, ed. University of California, Berkeley.

Price, M. R. and W. K. Hayes. 2009. Conservation taxonomy of the Greater Antillean Oriole (*Icterus dominicensis*): Diagnosable plumage variation among allopatric populations supports species status. J. Carib. Ornithol., 22: 19–25.

Reynolds, M. B. and W. K. Hayes. 2009. Conservation taxonomy of the Cuban Parrot (*Amazona leucocephala*): Variation in morphology and plumage. J. Carib. Ornithol., 22: 1–18.

Rix, M. G., J. A. Huey, S. J. B. Cooper, A. D. Austin and M. S. Harvey. 2018. Conservation systematics of the shield-backed trapdoor spiders of the *nigrum*-group (*Mygalomorphae, Idiopidae, Idiosoma*): Integrative taxonomy reveals a diverse and threatened fauna from south-western Australia. Zookeys, (756): 1–121.

（松浦啓一　Keiichi Matsuura：〒 305–0005　茨城県つくば市天久保 4–1–1　国立科学博物館　e-mail: matsuura@kahaku.go.jp）

図書紹介・New Publications

魚類学雑誌 66(2):272–273
2019 年 11 月 5 日発行

八郎潟・八郎湖の魚－干拓から 60 年，何が起きたのか．—杉山秀樹（著）．2019．八郎潟・八郎湖学叢書①，さきがけブックレット，秋田魁新報社，秋田．119 pp．ISBN 978-4-87020-408-9．1,300 円（税別）．潟は呼吸する．昭和 32 年に始まった国策八郎潟干拓事業で昭和 36 年に防潮水門が設置されたことにより，潟は淡水を吐くだけで海水を吸うことをやめてしまった．かつて日本第 2 位の面積を誇った八郎潟は，現在約 5 分の 1 の淡水湖，八郎湖および関連水路を残すのみとなっている．昭和 52 年から秋田県内水面指導所に勤め，最終的には秋田県水産振興センター長として平成 22 年に退職した著者は，八郎湖における増殖試験や調査研究を行う傍ら，八郎湖への流入河川および船越水道（八郎湖の排水路，汽水域）を含めた水域の生物調査を行った．その成果を小図鑑として整理することに加えて，八郎潟から八郎湖に至る魚類相，水産資源，漁業実態，食文化等の変遷を調査し，この度のブックレットに纏めた．海水の吸い込みをやめたことの水産資源への影響は大きい．ヤマトシジミ資源はほぼ壊滅．またニホンイトヨの激減は本種の全国における減少と軌を一にする，というよりそのきっかけになったのではないかとすら思えてしまう．一方でゼニタナゴやシナイモツゴ等がいなくなったことに関しては，生態系の構造変化や外来魚の影響などの複雑に絡み合う要因を魚種ごとや生活史ごとに考慮しなければなるまい．魚類相の変化もさることながら，漁獲量は最大時の約 1 万 6 千トンから約 80 分の 1 に，漁業者数も最多時の約 6 千 5 百人から約 40 分の 1 に減少し，それに伴って多様であったはずの食文化も失われつつある．著者は，自ら見たことと調べたこ

とを記述・解析・解説することに努め，干拓事業の歴史的・政治的背景や干拓と引換えの農業生産性などについては言及を避けている．おかげで本書は八郎潟・八郎湖に関する良質の文化史ともなっている．最後に著者は，たとえ面積が 5 分の 1 になってもそこに魚がいて，素晴らしい技術を持った漁業者が残っていることを指摘し，八郎潟・八郎湖を完全に死なしてはならないことを強調している．本書の全体的流れからだけでなく記述された個々の事例からも，水産行政，漁業管理現場や環境調査現場などに携わる人たちには参考として学ぶことが多いだろう．

（酒井治己　Harumi Sakai：〒 759–6595　山口県下関市永田本町 2–7–1　国立研究開発法人水産研究・教育機構　水産大学校 e-mail: sakaih@fish-u.ac.jp）

魚類学雑誌 66(2):273–273
2019 年 11 月 5 日発行

魚類分類学のすすめ～あなたも新種を見つけてみませんか？～．—今村　央（著）．2019．海文堂出版，東京．127 pp．ISBN 978-4-303-80003-1．1,800 円（税別）．本書は著者が大学院生時代から研究に携わってきた主にコチ科魚類を題材として，魚類分類学について一般の方向けに分かりやすく解説した一冊である．カバーにはスナゴチが大きく描かれていることからも，著者のコチ科魚類に対するただならぬ思いがあることが伝わってくる．本書は全 6 章で構成される．1 章では分類学について，アネサゴチ属やマツバゴチなどに関する著者の研究データを例示し，それを基に解説している．2 章では魚類とはどのような仲間なのかについて，概要を記している．3 章では国際動物命名規約について記している．規約の堅苦しい内容を実際の研究例（ナメラオニゴチやセレベスゴチなど）を出しながら，分かりやすく解説している．4 章では魚類標本の採集から登録，固定，保管の方法や重要性，さらに利用されるまでを著者の経験を基に解説している．5 章では研究の進め方について，形態学的なデータ収集方法，魚体スケッチの作図方法，論文執筆・投稿の方法などを解説している．6 章では著者の海外での標本観察について記している．本章には研究についてというよりは，著者の海外での研究以外の生活について主に記されている．海外のビールやワインなどのお酒の写真が多数掲載されていることから，「著者はいける口である」ことが読み取れる．本書は写真が多く使用されているため，手に取ってパラパラと読みやすい．魚類に興味がある高校生や大学に入りたての学生には本書を手に取って，分類学の面白さについて知ってもらいたい．

（河合俊郎　Toshio Kawai：〒 041–8611　北海道函館市港町 3–1–1　北海道大学大学院水産科学研究院　e-mail: toshio.kawai@fish.hokudai.ac.jp）

魚類学雑誌 66(2):273–273
2019 年 11 月 5 日発行

もっと知りたい！見えないものが見える川 奇跡の清流 銚子川．—NHK スペシャル取材班・内山りゅう・近藤玲介・平嶋健太郎・富川　光・森　哲也（著）．2019．山と渓谷社，東京．144 pp．ISBN 978-4-635-64003-9．1,600 円（税別）．NHK スペシャルで 2018 年 11 月に「見えないものが見える川 奇跡の清流 銚子川」と題して放映された，三重県紀北町を流れる銚子川のドキュメンタリーを書籍化したもの．銚子川は日本有数の清冽な川として知られるようになってきた．その魅力を，源流にあたる大台山系から河口の汽水域にある「ゆらゆら帯」にいたる景観や，そこにすむ魚類などのいきものだけでなく，自然地理学的論考や，子供から大人まで楽しめる川遊びなどの面から，各所に多数のカラー写真をまじえて，多角的に紹介している．銚子川では源流から河口まで，蒸留水のように透きとおった水が流れているが，水が透きとおることにより，タイトルにあるように，ほかの川では見えないものが見えるようになる．潮汐により動く塩水くさびがガムシロップまたは蜃気楼のような「ゆらゆら帯」として視覚的に確認でき，その動きに乗って移動し海水と淡水を行き来しつつ，遡上してくるアユやハゼ類などの回遊魚の行動が，手に取るようにわかり，魚の群れは空を飛ぶように見え，水面を進むカヌーは空中に浮かんでいるようだ．この清冽な水をはぐくんでいるのは豊富な伏流水．川の下を流れるもうひとつの川，伏流水の流れる河川間隙に，最近注目されるようになってきた「地下生態系」ともいうべき世界が広がっている．ほかの場所ではほとんど見ることのできないドウクツミミズハゼ類も，ここでは川底を掘り返すことで観察できる．地下水性ヨコエビ類の紹介もある．言葉では言い表せないほどの素晴らしい環境は，文字通り生態系サービスという言葉を実感させてくれる．その究極の生態系サービスを誰でも安全に，また末永く楽しめるように，川遊びのガイドの章もある．さて，源流の森から渓流，河川間隙の伏流水に至るまで，流れる水にばかり目が向いてしまいがちだが，他の川ではふつうにみられるような，人里によくあるよどんだ環境もあるのかもしれない．川や伏流水の生態系を構成する分解者として象徴的に紹介されている，ヨコエビが群がって食べている，小魚の遺体が，止水環境にすみ，河口まで渓流が続く銚子川のようなところにはふつうはすまない，タモロコまたはモツゴのように見えるのは，気のせいか．

（斉藤憲治　Kenji Saitoh：〒 935–0001　塩釜市新浜町 3–27–5　国立研究開発法人水産研究・教育機構　東北区水産研究所　資源環境部　e-mail: ksaitoh@affrc.go.jp）

魚類学雑誌 66(2):273–274
2019 年 11 月 5 日発行

ビワコオオナマズの秘密を探る．—前畑政善（著）．2019．サンライズ出版，彦根．128 pp．ISBN 978-4-88325-655-6．1500 円（税別）．滋賀県立琵琶湖博物館が一般向け解説書として発刊しているブックレットの 9 番目．琵琶湖淀川水系固有種ビワコオオナマズの繁殖生態についての著者の長期にわたる観察を中心とした，本種の全般的な解説書．本種の仲間としてナ

マズ目全体の簡単な紹介，古琵琶湖時代からほとんどその姿を変えない本種の化石の話題などに続き，本書のメインテーマである産卵の観察へと続く．当事者でないと知りえない細部が語られてゆく．それまで湖北の岩礁部のまわりでのみ知られていた本種の産卵場が，大津市市街地そばの琵琶湖の出口にもあることがわかったのは，著者の発見による．この発見をきっかけに，著者は産卵行動の観察にのめりこんでゆく．観察しやすい都市部に産卵場があったことがさいわいして，その行動観察は詳細を極める．著者により，その様式化された産卵行動のパターンや，産卵が起きるきっかけが水位上昇による岩場の冠水であることなどが解き明かされていく．岩場の冠水によって産卵が誘発されるという本種の習性は，現代の人工的な琵琶湖の水位調節とマッチしなくなり，またオオクチバスなどの魚食性外来魚により餌生物である小魚が捕食されて激減することで，本種の生存が追い詰められていく様が繰り返し語られているが，著者の危機感が伝わってくる．琵琶湖における，現代的な，土木技術的に精緻な水位調節のやり方は，自然の季節的水位変動の逆になるようになっているため，ビワコオオナマズだけでなく，他のコイ科魚類などにも計り知れない悪影響をおよぼしている．著者の研究などにより，自然な水位変動が琵琶湖の多くの魚類の生存を支えていることが明らかになったことで，人工的な水位調節が魚類に与える影響を低減するための工夫がなされるようになってきたことは明るい話題である．著者は永らく水族館機能のある博物館に勤務していたこともあり，本種の飼育と養殖についての最後の章にも，当事者でないと知りえない苦労話などが出ている．ところで，本書の重要な部分を占めると思われる，琵琶湖の人工的な水位変動とビワコオオナマズとの関係が，ふたつの章にわたり飛び離れて出てくるなど，本書を通読すると，その構成が少し散漫な印象を与える．また，誤植も目立つ．後者のほうは，版を重ねることで改善されるよう期待したい．

（斉藤憲治　Kenji Saitoh：〒 935–0001　塩釜市新浜町 3–27–5　国立研究開発法人水産研究・教育機構　東北区水産研究所　資源環境部　e-mail: ksaitoh@affrc.go.jp））

会員通信・News & Comments

魚類学雑誌 66(2):274–281
2019 年 11 月 5 日発行

トピックス

上皇陛下とハゼ類のご研究

上皇陛下（以下，「陛下」と記す）は，本年（2019 年）2 月に政府主催の天皇陛下御在位 30 年の記念式典に上皇后陛下と共にご臨席になり，同年 4 月末にご譲位され，30 年にわたる天皇陛下としてのお務めを終えられた．陛下は皇太子時代から「ハゼ類を専門とする魚類研究者」として国の内外の研究者や有識者の間で知られ，ご研究の成果としてのハゼ類の論文発表や魚類図鑑の分担執筆もなさっているので，近年では一般の人たちにも広くそのご業績が知られている．1980（昭和 55）年には長年の魚類学のご研究の業績によって，ロンドン・リンネ協会より世界で 50 名限定の外国会員のお一人に選ばれ，さらに 1998（平成 10）年には英国王立協会よりチャールズ二世メダルが陛下に贈られ，外国会員として初の受賞者になられた．陛下は，ハゼ類のご研究を本格的に始められると期をほぼ同じくして日本魚類学会の会員になられ，学会誌への論文投稿や，関東近辺にて開催された学会の年会に参加されるなどして学会員との研究交流も深めてこられた．今回，日本魚類学会からの依頼を受け，陛下の私的な研究所である皇居内生物学研究所においてご研究に身近に接している者として，陛下の研究者としての姿勢や研究足跡について「会員通信」の頁を通してご紹介する．

ご研究の経緯概観　陛下は，昭和天皇・香淳皇后のご長男として 1933（昭和 8）年 12 月 23 日にお生まれになった．ご幼少の頃の陛下は，赤坂離宮の近くに造られた東宮仮御所にお住まいになり，学習院初等科・中等科に在学中であった頃から生物や歴史にご興味を持たれていた．三浦半島の葉山御用邸近くの海ではアゴハゼやドロメ・キヌバリなど，特にハゼ類に親しまれたようで , 昭和天皇ご所蔵の図鑑をよくご覧になられたことやハゼ類の名前を昭和天皇から教えていただいたこと，昭和天皇の船でのご採集にお供した人が持ち帰ったチャガラをご覧になったことが強く印象に残っているなどのお話も伺った．三浦半島の黒崎海岸では，シマハゼ類を初めてご自身で採集され，葉山でのご経験と相まってハゼ類に対するご関心はご幼少のころから深まっていかれたようである．

陛下は，1959（昭和 34）年のご成婚の翌年，ご移居になった赤坂御用地内の東宮御所に設けられた「魚類研究室」で，ハゼ類の形態学を専門とする本格的な研究に着手された．昭和天皇がヒドロ虫類をはじめとする海産無脊椎動物を専門とされ，多くの動物学者の方々がその研究にかかわられたように，陛下も初めは水産学を専門とされる末廣恭雄博士（1904–1988）や日比谷　京博士（1918–2005）のご進講をはじめ，研究初期のころから水産や魚類の専門家より論文発表のための指導や助言を受けておられた．また学習院大学では政経学部に進学されていた陛下の魚類研究は，初め個人的な趣味から始まったともお話しされた．日比谷博士から紹介を受けた冨山